

第1章 新地域ビジョン策定の経緯

21世紀初頭の兵庫のめざす将来像を示し、中長期の県政の指針ともなっている「21世紀兵庫長期ビジョン」の策定から20年、改訂から10年を経て、世界も日本も大きな変革の中にある。兵庫県のみならず日本では人口減少の進行等の中で、地域の特性に合わせて、住民が共有出来る2050年の「なりたい姿」を描く。そのビジョンを地域住民、事業者、関係団体、行政等の多様な主体が共有し、実現に向けて各自取組や施策を進める。

第2章 時代の潮流・背景

兵庫県は2050年を展望した将来構想の一つの試案として、兵庫県将来構想研究会から検討成果を取りまとめた「兵庫県将来構想試案」を提示した。
2050年の東播磨地域を考える場合であっても、「兵庫県将来構想試案」に記載の問題や課題を参考に、次の5点を社会潮流とし、記載する。

1. 人口減少・超高齢化

本格的な人口減少時代に入った日本。出生率は人口の維持に必要な水準を大きく下回っている。本県においても発足以降ほぼ一貫して増加してきた人口は、2009年を境に減少に転じ、本格的な人口減少社会に入った。
県ビジョン課の推計では2050年の県人口は2015年比130万人減(24%減)の423万人となる。合計特殊出生率が人口の維持に必要な水準を下回る限り、人口は減り続ける。
2021年現在合計特殊出生率は1.4前後で推移。未婚化で出生数が減る一方、高齢化で死亡数が増え、自然減が拡大している。
一方、戦前は50歳に満たなかった国民の平均寿命は戦後急速に伸び、出生率の低下と相まって人口の高齢化を惹起した。65歳以上の人口は、実数、割合ともに増加の一途にあり、今後も増加していく見込みである。
県民の平均寿命は過去50年間で10年当たり男性2.5歳女性2.7歳伸びている。医療技術の進展や健康志向の高まりで寿命はさらに伸びていくと考えられる。

2. 自然の脅威：気候変動・風水害

R3.4.13

地球全体が暑くなり、異常気象が常態化する。気候変動は、人類の生存への最大のリスクとなる可能性がある。

- ・夏が長期化し、真夏の暑さが耐え難い水準に
- ・夏の昼間の活動は困難に
- ・学校や事業所の夏季休業は長期化
- ・県民はますます空調に依存した生活に移行
- ・冬は暖かくなり過ごしやすく

など兵庫が亜熱帯化し、県民の暮らしぶりが大きく変わる可能性がある。

1時間降水量80mm以上の年間発生回数(全国・年平均)13.9回(1976~85)⇒24.3回(2010~19)と約1.7倍に。

県内では1時間降水量50mm以上の年間発生回数が21世紀末には2倍以上に(気象庁予測)

3. テクノロジーの進化：データの最大活用

完全自動運転の普及、人の感情を理解し、創造力すら発揮するAIの出現。ゲノム編集による寿命の延伸。未来のテクノロジーは社会のあり様を激変させる。

あらゆるモノがセンサーと無線通信でインターネットにつながり、相互に情報交換を行うIoTが自動車や産業用と、家電など幅広い分野に拡大。

AI、IoT等のデジタル革新により現実空間と仮想空間が高度に融合したシステムが整備され、社会課題の解決や一人ひとりに最適化されたサービスの提供などが実現する。

4. 経済構造の変容：デジタル化の進展

デジタル経済の進展に伴って、ビジネスモデルの変化が進む中、既存の方法にとらわれることなく、兵庫の産業はどのように付加価値を生み出していくかが求められる。

また、新自由主義や株主資本主義の台頭の下、格差の拡大などの社会のゆがみが生じている。

5. 価値観と行動の変化：サステナブル志向・所有から利用へ

2015年に国連が採択したSDGsは将来世代のニーズを損なわずに現代世代のニーズを満たすことを目指し、2030年までに達成すべき17のゴールと169のターゲットを掲げている。

SDGsは、世界が直面する社会課題を網羅していることから、その解決を模索することはビジネスにおけるイノベーションにもつながる。このため、政府や自治体だけでなく、民間企業においても取組の機運が高まっている。

第3章 東播磨地域の特性

1. 東播磨地域のなりたち、自然、文化、歴史遺産

3市2町（明石市、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町）からなる東播磨地域は、兵庫県の臨海部中央に位置し、南が瀬戸内海、東は神戸市、西は姫路市、北は三木市、小野市、加西市の各市に接している。

管内東部には東経135度の子午線（明石市）が通り、中央部には本流流路延長・流域面積ともに県下最大の一級河川「加古川」（加古川市）が流れ、加古川流域には播州平野が広がる。東西の交通網が発達した地域で、南部は播磨臨海工業地帯の中央にあり、一般機械や鉄鋼などの重工業の生産拠点である。製造業が盛んな地域で、製造品出荷額は県民局別では4年連続で1位となっている。

気候は温暖な瀬戸内気候で、年間を通じて気温、湿度ともに過ごしやすい。梅雨を除いては降雨・降雪が少ない地域であるため、旱害に備えて古くから大小様々なため池が造られてきた。

甲子園球場の約12倍という県内最大の加古大池（稲美町）や、白鳳3年（675年）に築かれたという記録が残る県内最古の天満大池（稲美町）をはじめとする多くのため池が集中する地域でもあり、地域全体が豊かな水辺空間に恵まれている。

近年では、阪神淡路大震災、平成23年9月の台風12号による戦後最大規模の降雨により加古川水系及び法華山谷川水系で内水・外水氾濫等が発生し、床上浸水、床下浸水などの被害が発生しているが、歴史的に見ても大きな災害には見舞われたことが少ない地域である。

大中遺跡（播磨町）をはじめとする遺跡や古墳も多く見つかри、「播磨国風土記」などにも各地の記述が見られ、古代山陽道の駅家が残るなど古代から人が行き来する地域であった。中世以降も数々の歴史ある神社仏閣、城などが建築され、現在も一部その姿を残している他、国宝、県指定文化財なども数多く残る。

歴史ある神社が多いこの地域では、秋祭りが盛んに行われてきた。参加者は豪華絢爛な屋台を担いで練り歩く。各神社・各地区によって屋台の様相、屋台練り、参加者の服装等は異なっており、神事も獅子舞を用いるものや、神輿を池に投げ込むものなど多種多様である。中でも、曾根天満宮（高砂市）の一ツ物神事は県の無形民俗文化財にも選ばれている。

祭りはこの地域にとって欠かすことが出来ないものであり、老若男女問わず地域の人々に愛されている。

明治以降には複数の鉄道が東播磨地域を東西に貫くように敷設されるようになり、戦後には国道2号バイパスが同じく東播磨地域を東西に貫くように、また加古川市北部には山陽自動車道路が敷設された。東は神戸、大阪などの阪神地域、西は姫路に行きやすいという交通の便の良さから主に阪神地域、姫路地域のベッドタウンとして発展を遂げるとともに、東播磨地域それ自体も重工業の拠点として人口は増えていった。

南部に広がる平野では住宅・工場を中心に人が集まり、北部などでは交通網が南部に比べると発達しておらず、のどかな風景が見られるという都会らしい一面と田舎の一面を持ち合わせている。

また、交通利便性の高さや、住環境の整備、各市町の子育て支援等により近年は子育てがしやすい場所として子育て世代に選ばれるようになった。

2. 東播磨地域の人動き

東播磨地域の面積はおよそ266km²で、県全体の面積約8,400km²のわずか3.17%しか占めていないが、人口は県全体約540万人（令和2年2月1日現在）に対し、約71万人（令和2年2月1日現在）と約13%を占めている。※1

2000年までは東播磨地域の人口は急激に増加していたが、2000年以降は緩やかに減少傾向にある。全県と比較すると減少のペースはやや緩やかである。※2

平成12年から17年にかけて減少傾向にあった出生数・出生率は、平成17年から22年にかけては出生数が横ばい、出生率は増加傾向にある。その後出生率の増加は緩やかになりつつあるが、出生数の減少は全県に比べると緩やかである。※3

若年者人口は今後も減少し続けると推測されているが、一方の高齢者人口は2040年まで増加し続けると推測されている。後期高齢者人口は増減を繰り返し、ピークを迎えると考えられている。2050年には75歳以上の人口が東播磨地域の人口のうち22%になると推測されている。※4

平成24年からは転出超過の状態が続いていたが、平成29年からは転入超過に転じた。平成31年度では、進学時期及び就職時期に該当する15～19歳、20～24歳は転出超過ではあるが、子育て世代でもある25～29歳、30～34歳及び0～4歳は転入超過である。※5

県ビジョン課の推計では、2050年の東播磨地域の推計人口は619,000人で2020年に比べると約9万4千人、約13%減少すると見込まれている。※6

※1 …ひょうごEYE（令和2年3月発行）より

※2、3、5…東播磨新地域ビジョン策定データ（令和2年6月17日）より

※4、6 …2019年11年ビジョン課作成「兵庫県の新しい将来ビジョンの検討について」

3. 東播磨地域の魅力

東播磨地域中央部には一級河川「加古川」が流れ、加古川流域には播州平野が広がる。高低差が少ない地域であり、古代から人が行き来する開かれた土地であった。大中遺跡(播磨町)、西条古墳群(加古川市)などは国指定の史跡となっている。飛鳥時代には稲爪神社(明石市)、鶴林寺(加古川市)の前身となる寺、「石の宝殿」(高砂市)など、既に地域内にいくつもの神社仏閣が建立されており、県内最古のため池である天満大池(稲美町)も築造されるなど、当時から建築、土木などの優れた技術が地域には浸透していたことが伺える。

奈良時代初頭に編纂されたと考えられる書物「播磨国風土記」などにも各地の記述が見られ、「賀古」「印南」などの地名は字を変えながらも現在に受け継がれている。

中世以降も数々の歴史ある神社仏閣、城などが建築された。戦国時代には戦火に巻き込まれ失われてしまった神社仏閣もあるが、今なおその姿を残しているものも多く、国宝や県指定の文化財になっているものもある。

歴史ある神社が多いこの地域では、秋祭りが盛んに行われてきた。参加者は豪華絢爛な屋台を担いで練り歩く。屋台の様相、屋台練り、参加者の服装、神事等は各神社、各地区によって異なっている。祭りはこの地域にとって欠かすことが出来ないものであり、老若男女問わず地域の人々に愛されている。

気候は、瀬戸内海式気候であり一年を通じて温度、湿度等が安定している。梅雨の時期を除いて降雨、降雪は比較的少ない地域であり、温暖肥沃で日照に恵まれた地域ではあるが旱害を防ぐため古くから大小様々なため池が造られてきた。

また海岸沿いは、瀬戸内海・播磨灘の漁場でありタイやアナゴ、タコ、ノリなどをはじめとする海の幸が豊富に採れ、「明石の鯛」「高砂の穴子」などブランド力も高い。

地域内のため池は、県内最古のため池である天満大池や甲子園12個分の広さを持つ加古大池(稲美町)などもあり、中にはアサザやオニバスといった絶滅が危惧される動植物が生息する、ウォータースポーツが楽しめるなど個性豊かなため池も数多くある。一方でゴミ投棄や水質悪化等の増加、農業者の高齢化や後継者不足によりため池等の適正な維持・管理が困難となっている地域が増えてきているため、「ため池管理者」と「一般住民」が相互に理解し合い、東播磨を象徴する「ため池群と水路網」及びその歴史的・文化的資源を地域の財産として「守り、生かし、次世代に継承する」ため、農業者をはじめとして、地域住民、企業、実践活動団体、教育者や行政など多様な主体の参画と協働のもと、地域全体をまるごと博物館とする「いなみ野ため池ミュージアム」を平成14年度から展開している。

秋冬頃になると、東播磨地域のため池を中心にコウノトリの目撃情報が相次ぐようになった。秋冬にはため池の水が抜かれて魚などが見つけやすく、縄張りを持たない若鳥にとっては絶好のバカンス先になるためだ。令和元年度は26羽、令和2年度では93羽が地域で目撃されるなどコウノトリが次第に地域住民に認知されるようになり、今後東播磨地域での定着、繁殖への期待が高まっている。

サントリー(株)と東播磨2市2町(高砂市、加古川市、稲美町、播磨町)が循環型社会の形成を目

指して、「ボトル to ボトル リサイクル事業」に関する協定を全国で初めて令和3年に締結した。

協定に基づき、東播磨2市2町とサントリーは、市民・町民が分別した使用済みペットボトルを回収・再生して新たなペットボトルへと生まれ変わらせる「ボトル to ボトル」水平リサイクルを令和3年4月1日から開始し、域内工場で製品にして東播磨エリアに出荷・還元する。複数自治体と企業が連携して、「ボトル to ボトル」リサイクルに取り組むこと、このスキームで生み出されたリサイクルペットボトルを域内事業者が製造し、地域へ出荷・還元することはどちらも国内初の取組となる。

管内自治体は廃棄物の適正処理や東播磨の豊かな環境資源の保全に力を入れ、住民・行政・事業者が三位一体で取り組む「循環型社会」の実現を目指している。

災害にも強い地域であり、近年では阪神淡路大震災、平成23年9月の台風12号による戦後最大規模の降雨により加古川水系及び法華山谷川水系で内水・外水氾濫等が発生し、床上浸水、床下浸水などの被害が発生しているが、歴史的に見ても大きな災害には見舞われたことが少ない地域である。

明治以降には複数の鉄道及び国道2号が東播磨地域を東西に貫くように敷設され、戦後には国道2号バイパスが同じく東播磨地域を東西に貫くように、また加古川市北部には山陽自動車道路が敷設された。東は神戸、大阪などの阪神地域、西は姫路に行きやすいという交通の便の良さ、起伏が少ない播州平野は住宅地としての需要が高まり、主に阪神地域、姫路地域のベッドタウンとして発展を遂げるとともに、東播磨地域自体も重工業の拠点として人口は増えていった。

地域南部は播磨臨海工業地帯の中央であり、一般機械や鉄鋼などの製造業が非常に盛んな地域となっていて、製造品出荷額は県民局別では4年連続で1位となっている。

地域中部は住宅街が立ち並び、人が集まり南部は工場地帯、地域北部は比較的交通機関が発展しておらず、のどかな風景が見られるという都会らしい一面と田舎の一面を持ち合わせている。

平均的に交通利便性が高く、住環境の整備、管内自治体の子育て施策の充実等により近年は子育てがしやすい場所として、子育て世代の転入が他地域に比べて多くなってきている。

また、一時期は減少傾向にあった出生数・出生率は平成17年から22年にかけては出生数が横ばい、出生率は増加傾向にある。その後は緩やかになりつつあるが、出生率は増加している。

理念

将来像（めざすべき東播磨の姿）

将来像を実現するための取組の方向性

方向性

取組

水辺とものづくりでつながる未来

営みの源となる水辺と活力を生み出すものづくりの東播磨で、まちや歴史、自然、産業と人とのつながりを深め、新たな未来を創り出す

1. 自立快適・東播磨

誰もが自立し、健康で快適な生活を送る

2. 安心活力・東播磨

防犯・防災の基盤が整い、力強い産業が活力を生み出す

3. 環境交流・東播磨

自然環境の営みを大切にし、地域内外の交流が広がる

1. 軽やかに動き、いきいきと暮らす

道路ネットワークの整備に加え、自動運転、デマンド交通など新たな交通機関が充実し、地域を軽やかに移動できる。犯罪や災害から暮らしを守る安全安心の基盤が整うとともに、医療体制の進展とスポーツの活性化により暮らすだけで健康長寿になれる

2. ひとを育み、生きがい実感できる

地域ぐるみで安心して子どもを産み、育てやすい環境が整い、自立して挑戦する若者が育つとともに、生き方、働き方の選択肢が広がり、自分らしさや大切にしている価値を追求できる

3. 伝統と文化が息づき、交流が広がる

暮らしの中に息づく祭りなどの伝統文化、豊かな歴史が地域の魅力を高め、暮らしやすい環境や多彩なツーリズムに惹かれた移住者や観光客を国内外から引き寄せる

4. 人・もの・情報がつながり、元気にぎわう

デジタル技術、AI、ビッグデータを基盤に人・もの・情報が多様につながり、多くのスタートアップやグローバル企業が生まれるとともに磨きがかかったものづくり技術がグローバルな事業展開を牽引している

5. 自然を生かし、資源が循環する

里山、ため池、川辺、海浜が広がる豊かな自然と暮らしが生存し、農水産物の地産地消や再生可能エネルギーの域内自給が成立して、資源の好循環を生み出している